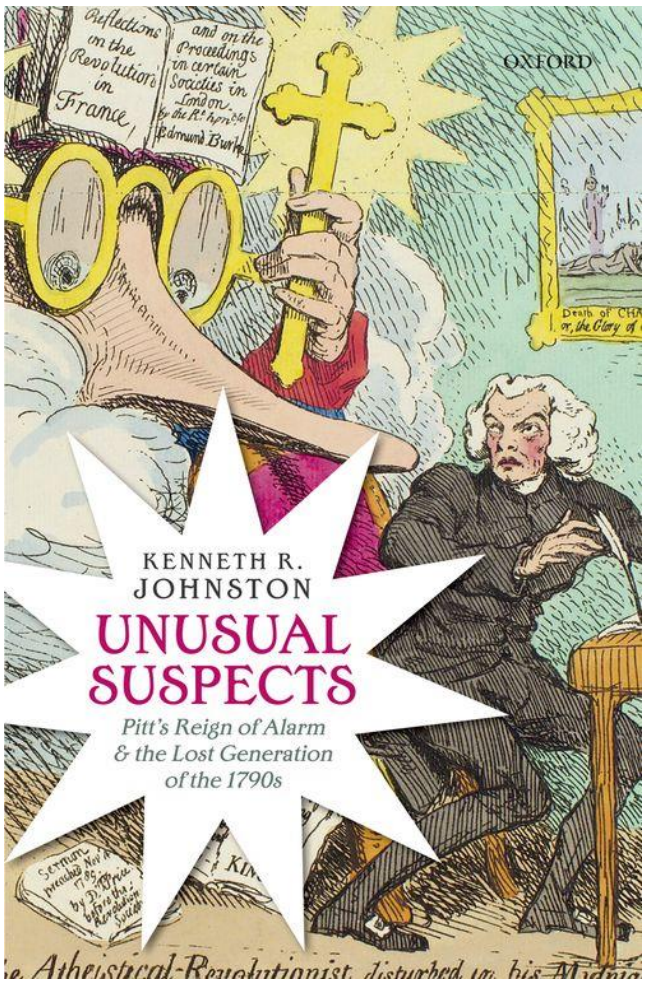
Book Review

Kenneth R. Johnston

Unusual Suspects: Pitt's Reign of Alarm and the Lost Generation of the 1790s

Oxford UP, 2013. xxi + 376 pp. £46.99



田久保 浩

シェリーは、1811 年 11 月より 3 か月近く、湖水地方ケズィックのロバート・サウジーのもとに 3 か月間逗留する。そこで自分の敬愛するウィリアム・ゴドウィンがロンドンに健在であることを聞き、彼に宛てて自己紹介の手紙を書く。その中に、「あなたの名を名誉ある死者の列に加えておりました」という一言がある。ウィリアム・ゴドウィンは、 十八世紀末、イギリスで最も著名な哲学者であり、1790 年代の主要な作家や進歩派の知識人のほとんどの面々と交流を持つ存在であった。そのゴドウィンがなぜ、すでに他界していると思われていたのか。ケネス・ジョンストンの *Unusual Suspects* を読めば、シェリーがゴドウィンをすでに没していたものと誤解していた理由、すなわち 1790 年代のウィリアム・ピットによる抑圧政治の時代を経て、ゴドウィンの名が、社会的に抹殺されていた状況がわかるだろう。

著者のケネス・ジョンストンは *Wordsworth and The Recluse*（1982）, *The Hidden Wordsworth*（1998）など、緻密な調査によりワーズワースの人物と作品の実像に迫る研究で知られている。本書にもテーマである 1790 年代の社会情勢とロマン派に関係の深い人物たちに関する事実が凝縮されており、ワーズワースら、第一世代だけでなく、冒頭で述べたように、シェリーや第二世代のロマン派の理解に

とっても欠かせない内容となっている。前提となっているのは、そもそもイギリス・ロマン派の文学とは、ジェローム・マッガンが *The Romantic Ideology*（1983）で論じたように、フランス革命で高まった理想社会への希望が 1790 年代の政治的抑圧によって屈折して生まれたものだという理解である。タイトルの *Unusual Suspects* は、ブライアン・シンガー監督の映画 *The Usual Suspects*（1995）からとったもので、「いつもの容疑者」に対して、われわれの知らなかった「意外な容疑者」をさす。1791 年のバーミンガム暴動で暴徒たちの標的となった科学者であり進歩的宗教観を講じていたジョセフ・プリーストリー、『人間の権利』でフランス革命を擁護し、1794 年イギリスに不在のまま「扇動的名誉棄損」で有罪となったトマス・ペイン、1794 年反逆罪容疑で逮捕され、無罪となったのちも、ピットの抑圧政策に反対する講演を続けたジョン・セルウォールらは、目立つ標的であり「いつもの容疑者」と言えるだろう。その陰で、こうした論客たちの主張に共感しながらも、ピットの抑圧政策と一体となった世間の反革命、反フランス感情の圧力の前に沈黙を強いられ、あるいは、職を絶たれ、政治的発言を封じられた数多くの有能な人物たちの存在があった。その中には、第一世代のロマン派、ワーズワース、コールリッジ、サウジー、ラム、ブレイク、バーンズらも含まれる。その周囲にはさらに、これらの作家たちとは切り離せない数多くの「意外な容疑者」たちの姿があった。

セルウォールは、詩人、作家としての活躍を志すが、フランス革命後、イギリスの政治改革を目的に市民の連携を目指すロンドン通信協会に参加、主要な論客として、政府批判の先鋒に立ったことで、逮捕され、トマス・ハーディー、ホーン・トゥックとともに国家反逆罪で裁判にかけられる。ウィリアム・ゴドウィンらは、彼らを弁護する主張を発表し、結果、市民の注視する法廷で無罪判決を勝ち取った。傍聴席にはクウェイカーの一家に育ち、後に人気作家となる若きアメリア・オーピーの姿もあった。オーピーは、つつましい女性の生き方を説く小説で知られるが、1853 年、彼女の死の直前に書かれた手記には、この時の思い出として、正当な言論が弾圧されることへの恐怖とともに、トマス・ハーディーが無罪宣告を受けたときに感じた自由の精神と高揚感について、彼女の人生のなかでの最高の瞬間だったとしてつづられていた（21-22）。無罪判決を受けたセルウォールは、ふたたび講演活動を開始し、政府の言論弾圧を糾弾する。講演の内容は同時に冊子として印刷した。ふたたび裁判にかけられた際の無罪の証拠とするためである。

政府はこれに対して 1795 年、言論封殺二法案（Gagging Acts）で一切の反体制運動の封じ込めを目指す。扇動集合罪法（Seditious Meeting Act）と反逆罪法（Treason Act）である。ゴドウィンは、セルウォールの過激な行動主義が政府の強硬策をまねいたと批判的に論じたため、セルウォールと仲たがいしてしまう。一方、セルウォールは、一見同時代の政治とは無関係な古代ローマ史などのテーマを論じる中で政権批判を続けようとするが、たびたび暴漢により講演を妨害され、暴行の被害を受けるなどの事件が重なり、言動を封じられてゆく。しかしこのセルウォールの勇敢な姿勢を英雄として尊敬していたのが、チャールズ・ラムである。1797 年、コールリッジは、セルウォールがコールリッジやワーズワー

スが家を借りたサマーセットのネザーストーウェイに移住を計画していることを書き送ると、ラムは、この英雄と対面することへの希望に胸を躍らせる。ちなみにコールリッジは、ピットの言論弾圧を批判して 1795 年、*The Plot Discovered; or An Address to the People, against Ministerial Treason* という冊子を出版していた。ワーズワース自身、1797 年から 1798 年にかけて、ネザーストーウェイから少し離れたリスウェンに家を借りたセルウォールを訪問している。ジュディス・トムソンは、*John Thelwall in the Wordsworth Circle: The Silence Partner*（2012）において、『抒情民謡集』が生まれる時期におけるセルウォールの役割の重要性に注目する。

長年のワーズワース研究家として、ジョンストンは、『序曲』におけるワーズワースの注目すべき政治的な詩句について指摘する。ワーズワースはなぜ、生前に『序曲』を発表しなかったのか。1805 年版『序曲』第 13 巻の後半にその鍵があるという。

> Our shepherds (this say merely) at the time
> Thirsted to make the guardian crook of law
> A tool of murder. They who ruled the state,
> Though with such awful proof before their eye
> That he who should sow death, reaps death, or worse,
> And can reap nothing better,　　(645-50)
>
> われわれの羊飼いは（名だけだが）当時
> 守護者としての牧者の法の杖を
> 殺人の道具としようと欲した。この国を治めた彼らは
> 目の前に突き付けられた恐ろしい証拠を知っていたのに。
> 死の種を撒く者は、死かもっと悪い報いを受け、
> そしてそれ以上のなにものも収穫できないと。

「目の前の証拠」とはロベスピエールの恐怖政治の結果であり、そのことをよく知っていたにもかかわらず、殺人的な言論弾圧の法を武器にしたのは、ウィリアム・ピットに他ならない。ピット政権のもとで強化される言論弾圧を、ワーズワースは絶望的な思いで見守っていたのである（255-56）。

さて、ウィリアム・ゴドウィンは、彼の理想的政治哲学をフランスのジャコバン主義と結びつけられることで、体制派から揶揄や攻撃を受けたことにとどまらず、かつての進歩的論壇の同志サミュエル・パー、ジェイムズ・マッキントッシュらからも批判を受ける。しかし彼の社会的地位に致命的な打撃を与えたのは、1797 年、娘メアリーを出産した際に亡くなった妻メアリー・ウォルストンクラフトの回顧録を出版したことであった。ゴドウィンは、ウォルストンクラフトが、自ら『女性の権利の擁護』で主張したように、自らの主義主張、情熱、生き方に忠実に生きたということを、追悼の意味で書き記しておくつもりで出版した。しかし、彼女のフランスでのギルバート・イムレー（ファニー・ゴドウィンの

父）との出会い、彼の冷たい仕打ちと自殺未遂事件等を詳細に書き残したことは、性的放埒さ、博愛的情熱とジャコバン政治の暴力性とを結びつけて非難するミソジニスト言説を広める側に格好の攻撃材料を提供する結果となった。模範的家庭道徳を説く反ジャコバン小説や、あらゆる風刺による批判の的になり、そのことは、彼女の生き方を讃えるゴドウィンに跳ね返ってきた。もはや、彼の著作を発表する出版者すら見つからなくなった。そうした時期、児童書執筆の経験のあるメアリー・ジェーン（クレア・クレアモントの母）と出会い、再婚する。そしてウィリアム・スコルフィールドというペンネームで児童作家、児童書出版者として生計を立てていた。シェリーと出会う 1812 年まで 10 年以上にわたって別人の人生を歩んでいたのである。

シェリーの『クイーン・マブ』には、ウォルストンクラフトの影響が濃い。またシェリーはゴドウィンとの出会いからしばらくして、メアリー・ゴドウィンに会い、ウォルストンクラフトの娘ということで強い関心を持つ。当時、一般的にはその名がほとんどタブーであったゴドウィンやウォルストンクラフトについて、これだけ強い共感を持っていたということは、シェリーの知的関心が当時の文化背景にあって特異であったことを示唆する。1790 年代の抑圧政策によって自由言論が封じられていた十九世紀初頭の文化状況を理解していたシェリーは、十九世紀以降の言説を信用せず、彼の知の基盤をホルバッハら十八世紀の啓蒙思想、あるいは 1790 年代のゴドウィンやペインに求めていたのである。

1811 年の 11 月、シェリーに会ったサウジーは、*The Necessity of Atheism* を書いてオックスフォードを退学になった社会改革に燃える彼を、体罰に抗議する論文を出版してウエストミンスター校を退学処分となった自分の姿と重ね、喜んで迎え入れた。シェリーにとっても、この当時までサウジーは、*Thalaba the Destroyer*, *Joan of Arc*, *Madoc* など、エキゾチックな舞台を背景に自由を求める主人公を描く作品の作者として、シェリーのお気に入りの詩人であった。ただしシェリーとの出会いから間もなく、桂冠詩人の職を受けるなど、すっかり体制側に迎合した彼の姿をみて落胆する。しかし 1802 年の *The Edinburgh Review* 上の『破壊者サラバ』の書評に見るように、ホイッグ派のジェフリーからも、あるいは Anti-Jacobin の編集者で後に、*The Quarterly Review* の主幹となる王党派のギフォードらからも、サウジーは、ワーズワース、コールリッジらの一味として、すなわち民主派傾向の要注意人物としてマークされていたのである。1794-95 年の期間にはコールリッジらと自由の国アメリカ、ペンシルベニアの地に、抑圧政策の進むイングランドから逃れてコミューンを築くという計画に熱心に取り組んでいたのだが、これは革命思想を実現するための政治的実践に他ならない。1799 年には匿名で政治抑圧と、金銭崇拝、弱者いじめのはびこる世相を風刺した “The Devil’s Thoughts” をコールリッジと共作し、シェリーはこれを真似て “The Devil’s Walk” を書いている。

こうしたロマン派作家たちの 1790 年代の足跡をたどるなかで見えてくるのは、ロマン派はフランス革命に幻滅して、それに背を向ける形で新しい文学を生み出したものという文学史観というものは、ジェローム・マッガンの指摘した「ロマン派イデオロギー」という虚構の産物に過ぎないという事実であ

る。1792 年以降一度もイギリスに帰らず、生涯フランス革命支持の姿勢をけっして曲げなかったヘレン・マリア・ウィリアムズをワーズワースはずっと敬愛し続けた。『抒情民謡集』の執筆はピットの抑圧政策批判と並行して行われた。第一世代ロマン派やその周辺の人々が、保守派の陣営に加担するのも、ほとんどが生活を維持するためのやむを得ない事情によるというのが、1790 年代を生きた何十人もの人物について、ジョンストンの明らかにするところである。本書は、ロマン派文学を十八世紀後半からの広いスパンで、また、女性作家たちを含めた多くの作家集団のなかで研究する必要があることを強く訴える一冊となっている。

（たくぼ・ひろし　徳島大学）